

9月13日（日）主日礼拝レジュメ

「二つのものが一つにされるみわざ」 使徒の働き 8章14～17節

14節を見ますと、エルサレムにいる使徒たちがサマリアの人々のもとへペテロとヨハネを遣わした。しかしサマリアの地方にまで福音が広がったことは、1章8節「しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」とのみことばの成就であり、初代教会にとっては新しい時代の幕開けとも言えるような出来事であった。それで使徒たちはぜひサマリアに行って、そこで何が起こったのかを見て来なければならないと思ったのだろう。しかし、それとともに回心者がサマリア人であったということもペテロとヨハネが遣わされた理由だった。つまり敵対関係にあるサマリアに福音を伝えたことは正しかったのか、サマリア人は正しく福音を理解して信じたのだろうか、そしてサマリア人の信者たちがエルサレム教会の信者たちに受け入れられるだろうかということなど、さまざまな理由があったのではないか。

16節「彼らは主イエスの名によってバプテスマを受けてただけで、聖霊はまだ、彼らのうちのだれにも下っていなかったからであった。」このことは、2章38節でペテロが「それぞれ罪を赦していただくために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。」と言った。ところが、サマリア人たちにはそうはならなかった。これは矛盾なのか。ペンテコステ派の人たちや使徒的な継承ということを主張する人たちの中に、さまざまな意見があるが、これは普通のことでなかったのか、これを今のキリスト者の信仰にも当てはめて、自分たちの教理の根拠とはできない。また、ピリポの教えが不十分であったとか、サマリア人の福音の理解が正しくなかったとか、逆に使徒たちがピリポの教えを補足して、サマリア人たちの信仰の理解を助けたということでもない。

それでは、なぜここで主イエスの名によってバプテスマを受けた時に、彼らのうちの誰にも聖霊が下らなかったのだろうか。それは、神がご自分のみところにより一時的に聖霊が下るのを差し控えられたと考えるべき。

コリント人への手紙第二 1 章 2 2 節に「神はまた、私たちに証印を押し、保証として御霊を私たちの心に与えてくださいました。」

御霊をお与えになるのは神であり、人の側で、イエスの名によってバプテスマを受けた者たちに対して神が聖霊を与える方法や目的をこうでなければならないとかこうすべきなどと指定することはできないし、そんな権威を私たちは持ち合わせてはいない。

1 7 節で遣わされたペテロとヨハネがサマリアの人々の上に手を置いたことは、互いの交わりとエルサレム教会とサマリアのクリスチャンたちが、まさに信仰によって一つとされた証しと考えるべき。その証しとして聖霊が下った。このことは、自分たちの内に聖霊を宿す者としてまさに一つとされているということ、そこにはもちろん歴史的なことで生じた敵意はもはやないということの意味している。そのことを明確にするために、あえて主はサマリア人たちに御霊を与えることを差し控えておられたとも考えられる。

ユダヤ人とサマリア人の間には敵意があり、両者はまさに敵対関係にあった。人の側で関わらないようにと避けていた人たちが実は救い主を心から待ち望んでいた。そして、ピリポがみことばの福音を宣べ伝え、神の国とイエス・キリストの名について宣べ伝えたことを信じて、男も女もバプテスマを受け、二人の使徒たちが彼らの上に手を置くと、彼らは聖霊を受けた。ここに、聖霊を通しての交わりが実現し、聖霊がまさにユダヤ人とサマリア人のクリスチャンたちを一つにした。

エペソ人への手紙 4 章 4 ～ 6 節「あなたがたが召された、その召しの望みが一つであったのと同じように、からだは一つ、御霊は一つです。主はひとり、信仰は一つ、バプテスマは一つです。すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父である神はただひとりです。」

まさに御霊だけがすべてのものを一つにされるお方だということ。

エペソ人への手紙 2 章 14 節「実にキリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し」

この場合は、ユダヤ人と異邦人に適用されていますが、ユダヤ人とサマリア人についてもこの場合は言える。

私たちも、ピリポのように主に導かれつつ、出かけて行き、みことばの福音を宣べ伝えたい。そこに主が必ず働き、人を信仰へと導き、すべての人が御霊によって一つとされる時が来る。私たちが信仰に導かれたのも、ただ神の恵みによる。私たちは、実は主の救いからほど遠いところにいた者たちだった。あの人はどうだろう、この人はどうだろうなどと言える人は私も含めて誰もいない。そのことを忘れないようにしたい。